

## 聖都アルダビールとサファヴィー朝下のサフィー廟

守川知子

### The Holy City of Ardabil and the Shrine of Shaykh Ṣafī al-Dīn under the Safavids

MORIKAWA, Tomoko

This paper examines the development of the holy city of Ardabil, where the mausoleum of Shaykh Ṣafī al-Dīn (d. 1334), the founder of the Sufi order of Safaviyya and the ancestor of the Safavid Empire (1501–1736), is located, using two shrine-related Persian documents (ṣarīḥ al-milks and *Tārīkh-i Ḥayātī*); a drawing and descriptions by Adam Olearius, who visited the site in 1637; and European travelogues of the sixteenth and seventeenth centuries.

A quantitative analysis of the endowments in the *Catalogue of the Safī Shrine Properties* (‘Abdī Beg’s *Ṣarīḥ al-Milk*) shows that land purchases and endowments were concentrated during the reigns of the second master of the Safaviyya Order, Shaykh Ṣadr al-Dīn (d. 1391), and the second Safavid monarch, Shāh Ṭahmāsb (r. 1524–76). At the same time, peculiar buildings such as the Chilla-khāna (retreat), the Jannat-sarā (assembly hall), lodgings, and a bath in the shrine, which are not found in other Imams’ mausoleums or Imāmzādehs, reveal the unique character of the Shaykh Ṣafī mausoleum, which began as a Sufi training place.

Ardabil, known as a pilgrimage site of the Ṣafī Shrine, was also a commercial center under the Safavid Empire, as it was located at a strategic point in northern Iran and was surrounded by silk-producing areas such as Shirvan and Gilan, which were the main exports of the Safavid Empire. Foreign travelers’ accounts of Ardabil as a “pilgrimage site” suggest that its location at the nexus of caravan routes was another important factor in the popularity of pilgrimages to the Ṣafī Shrine, which enjoyed the patronage of the Safavid royal family.

The Shrine of Shaykh Ṣafī was established as a saint’s mausoleum with the basic structure of a Sufi order; later, in the Safavid period, it was repositioned as the ancestral mausoleum of the royal family and their “private treasury,” with an enormous wealth of endowments and donations. In this process, Ardabil came to be known as the “Dār al-irshād” (Capital City of Guidance), with the Shrine of Shaykh Ṣafī at its center.

**Keywords:** Shrine of Shaykh Ṣafī, Ardabil, Safavids, Pilgrimage, Holy City  
キーワード: サフィー廟, アルダビール, サファヴィー家・朝, 参詣, 聖都 (宗教都市)



はじめに

1. アブディー・ベグ版サフィー廟不動産目録に見るサフィー廟所有物件
  - 1.1 アブディー・ベグ版サフィー廟不動産目録 (1570年編纂)
  - 1.2 地域別・時代別分析
2. スフィー廟聖者廟としてのサフィー廟
  - 2.1 サフィー廟の建造物
  - 2.2 『ハヤーティー史』とサフィー廟の建造物

### はじめに

アルダビールは王国の中で最も古く、最も祝福された町のひとつである。ペルシアの数人の王がそこに住んでいたという理由だけでなく、とりわけ、彼らの宗派の長であるシャイフ・サフィー (Scich Sefi) がそこで生き、死んだことによる。[Olearius: 238]

アルダビールは「ダール・アルイルシャード (Dār al-Irshād)」、すなわち「教導の都」と呼ばれる。この語がいつごろから使われ始めたのか正確なところはわからないが、ヒジュラ暦 912 年 (西暦 1506-07 年) にはその名称が見られるようになり、サファヴィー朝期 (1501-1736) に入ってから頻りに用いられている [Shaykh al-Hukamāyī 2009: 151 (No. 610); Fragner 2013: 75; *Ṣariḥ al-Milk*: 9b; *Ḥayātī*: 43]。「教え導く」というのは、サファヴィー教団の名祖にしてサファヴィー王家の始祖であるシャイフ・サフィー・アッディーーン (1252/3-1334) がここに居を構え、教団を率いて弟子を導き、そしてこの地に眠るからである。

### 2.3 サフィー廟とレザー廟

3. ヨーロッパ人の旅行記にみるサファヴィー朝下のアルダビールとサフィー廟
    - 3.1 17 世紀のアルダビール
    - 3.2 ヨーロッパ人の見たサフィー廟
    - 3.3 サファヴィー朝下の「聖都」アルダビール——その宗教的・経済的重要性を中心に
- おわりに

本稿では、サフィー廟およびサフィー廟を擁するアルダビールがいかにして発展したか、またサフィー廟がアルダビールやサファヴィー朝にとってどのような意味を持っていたのかについて、サファヴィー朝のシャー・タフマースブ (在位 1524-76) 治下で編纂されたサフィー廟不動産目録 *Ṣariḥ al-Milk* および『ハヤーティー史 *Tārīkh-i Ḥayātī*』の 2 点のサフィー廟関連史料と、16~17 世紀にアルダビールを訪れたヨーロッパ人の旅行記を用いて検討する。

### 1. アブディー・ベグ版サフィー廟不動産目録に見るサフィー廟所有物件

最初に、アルダビールで最も重要な建造物であるサフィー廟の拡大過程をサフィー廟不動産目録 *Ṣariḥ al-Milk* (アブディー・ベグ著) からたどってみよう<sup>1)</sup>。同不動産目録は、証書のあるものを収録した第 1 部 (全 396 件) と、証書がなく物件名のみを記載した第 2 部 (全 229 件)、およびサフィー・アッディーーン一族で子孫がおらずサフィー廟に埋葬されている者の不動産 67 件をリスト化した終章に分かれている<sup>2)</sup>。第 2 部はすべて日付がな

1) 本稿で用いる *Ṣariḥ al-Milk* は、本共同研究会 (代表・渡部良子「イスラーム聖者廟の財産管理に関する史料学的研究: イラン・サファヴィー朝祖廟を事例として」(2018-20 年度)) で主に検討対象としたアブディー・ベグ版で、特にイラン国立博物館所蔵の 3718 写本のみ限定する。

2) 数字はいずれも暫定である。1 枚の証書に同一地域の複数の物件がまとめて記載される場合も ↗

表 1

	シャイフ	年代 ヒジュラ暦 (西暦)	アルダ ビール 市内	アルダ ビール 郡内	アゼル バイ ジャン	ギー ラーン	シール ヴァーン	イラーケ・ アジャム	ファー ルス	合計
①	サファイー・ アッディーン	700-735 (1301-34)	2	17	19	2	0	0	0	40
②	サドル・ アッディーン	735-794 (1334-91)	21	73	50	6	0	1	0	151
③	端境期	794-899 (1391-1494)	0	5	5	2	0	0	0	12
④	シャー・ イスマーイール	899-930 (1494-1524)	4	0	4	1	0	3	0	12
⑤	シャー・ タフマースブ	930-977 (1524-70)	43	22	48	3	2	1	7	126
⑥	不明	--	8	24	21	1	0	1	0	55
	合計		78	141	147	15	2	6	7	396
	第2部	--	1	12	33	9	4	169	(1)	229

いたため<sup>3)</sup>、行論上ここでは第1部のみを対象とする。

### 1.1 アブディー・ベグ版サファイー廟不動産目録 (1570年編纂)

アブディー・ベグ版(イラン国立博物館3718写本)のサファイー廟不動産目録第1部には、396件の売買もしくはワクフの証書をもとにしたサファイー廟所有の不動産が収載されている。項目は地域別(アルダビールの場合は不動産の種類ごと)になっており、「アゼルバイジャン/アルダビール/「教導の都」(=市内)」、「市外(=アルダビール郡部)」、「アゼルバイジャン/アルダビール以外」、「ギーラーン」、「シールヴァーン」、「イラーケ・アジャム」、「ファールス」となる。

試みにこれを、サファヴィー教団のシャイ

フ(教団長)ごと、すなわち、①サファイー・アッディーン期(ヒジュラ暦700-35/西暦1301-34年)、②サドル・アッディーン期(735-94/1334-91年)、③端境期(794-899/1391-1494年)、④シャー・イスマーイール期(899-930/1494-1524年)、⑤シャー・タフマースブ期(930-77/1524-70年)の5期に分類してみると、表1のようになる<sup>4)</sup>。

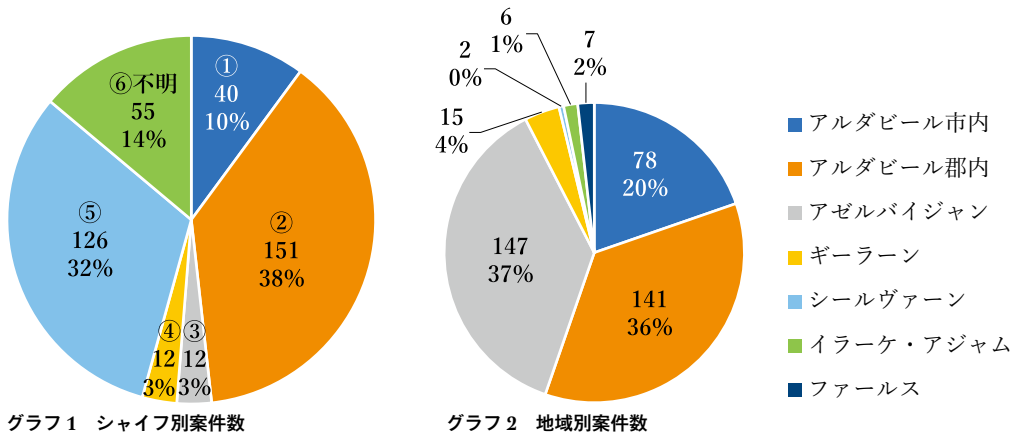
シャイフごとの案件数を見ると<sup>5)</sup>、サファイー・アッディーン期(①)には40件(10%)、サドル・アッディーン期(②)には151件(38%)の売買文書やワクフ文書が確認されるが、その後の約100年間(③)にはわずか12件(3%)と激減する。サファヴィー朝を創設したイスマーイール(在位1501-24)のシャイフ期(④)の30年間には12件(3%)、そしてタフマースブ期(⑤)

↗ あれば、単一の証書でも物件が複数の地域に跨っている場合もある。前者の場合はまとめて1件となり、後者の場合は地域ごとに複数回カウントされる。そのため、数え方によってかなりの増減がある。

3) 229件のうちの一部には、欄外に「744(1343)年ラジャブ月にワクフとされた」「946(1539/40)年に聖廟のワクフとなった」という記載がある。アブディー・ベグ版3718写本の中で最も新しい日付の「1022(1613/14)年」もまた、同じマラーゲの項目の欄外に見られる[*Ṣariḥ al-Milk*: 153a]。

4) なお、サドル・アッディーン没後からシャー・イスマーイールまでの約100年の端境期には、ホージャ・アリー(832/1428没)、シャー・イブラーヒーム(851/1447没)、ジュナイド(864/1460没)、ハイダル(893/1488没)らがいる。899/1494年は、イスマーイールの即位年ではなく、兄スルターン・アリー(893/1488没)の死去年である。さらに、タフマースブの在位は984/1576年までであるが、ここではサファイー廟不動産目録の完成年である977/1570年までとする。

5) サファイー廟不動産目録等を用いた教団長ごとの廟財産形成の経緯や特徴については、Gronkeが包括的にまた非常に精緻に検討している[Gronke 1993: 294-357]。



には126件(32%)が数えられる(グラフ1参照)。

なお、アブディー・ベグ版不動産目録の中で最古の日付は、ザンジャー地方のチャラル村(チェナル村)の売買文書に見える「684年ラビー・アルアッワル月」である[*Şariḥ al-Milk*: 114b]。同じ箇所には、「686年ジュマダー・アルアッワル月末」の日付のある土地の売買証書が現認できる物件がある。ただし、これらはその信憑性が疑わしく、実際には、サドル・アッディーンの子ゾィヤー・アッディーン・ムッタハルが100年後の786~787/1384~85年に証書に記載のある人物たちから譲渡もしくは買い戻している[*Ibid.*]<sup>6)</sup>。さらに、ヒジュラ暦680年代というのは、サフィー・アッディーンの子シャイフ・ザーヒドが亡くなって彼が教団を引き継いだ700/1301年よりも前のことであり、サフィー・アッディーン自身がそのころから土地購入などの活動をしていたかどうかは不明である。そのため、これらの最古層の日付については、実際に買い戻された日付を優先し、表には含めていない<sup>7)</sup>。

## 1.2 地域別・時代別分析

次に地域別(グラフ2)に見ると、アルダビール市内が78件(20%)、アルダビール郡内が141件(36%)、アゼルバイジャン地方にある物件が147件(37%)、その他の地域はギーラーンが15件(4%)、シールヴァーンはわずか2件で、イラーケ・アジャムとファールスがそれぞれ6件(1%)と7件(2%)である。

ここからわかるように、サフィー廟が所有する不動産は、アルダビールの内外にあるものが主であり、さらにはアゼルバイジャン地方のものを含めると、その不動産の9割以上(93%)が「地元」にある。ちなみにアゼルバイジャンの項には、オールドゥーバード(現ナフチェヴァン自治共和国)、ウルミエ、タブリーズ、メシュキーンシャフル、チュフルサアド(現アルメニア)、ギャルムロード、マラーゲ、モガーン平原、ハシュトルードが含まれるが、なかでもアルダビールに近いメシュキーンシャフルやギャルムロード近郊の村々や農地が多く設定されている点が特徴的である。

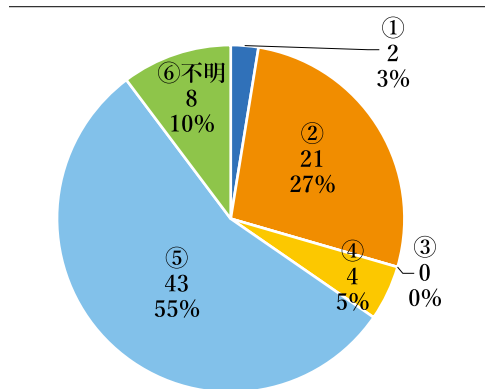
6) アブディー・ベグ版のもうひとつの写本であるイラン国立博物館3719写本も同様[254-255]。

7) Luṭfiはシャー・アッパース時代の17世紀初頭の日付をいくつか記しているが、これらの日付はアブディー・ベグ版の3718写本には現れない[Luṭfi 2016: 231, 242-243, 254-255]。なお、特に同写本第2部(証書なし)に頻出する「1022年」といった後世の日付などの欄外書き込みについては、本論集の渡部論文を参照されたい。

サフィー・アッディーン期には、アルダビールの郡部やハルハールの村を中心に、733年シャッワール月5日/1333年6月19日の日付のあるワクフが10件ほど見られるが、これこそは、サフィー・アッディーンが亡くなる数年前に全財産を寄進した、とされているものであろう。サフィー・アッディーン自身も相当な財産を有しており、教団の発展と、死後、自身の墓が巡礼地となることを企図していたことが明らかとなる。

アルダビール郡内に限ると、サドル・アッディーン時代が73件と全体の半分を占める。また、全体的な数でもサドル・アッディーン時代に151件の購入・寄進文書があり、全案件の4割近くが彼のシャイフ時代に設定されたことがわかる。この数は、サファヴィー家が王朝を創設した後のタフマースブ時代とともに突出して多く、また、サドル・アッディーン没後からサファヴィー朝成立までのおよそ100年間にわずか13件しかないことに鑑みると、サドル・アッディーンがいかにサファヴィー教団の祖にして父親の墓廟の発展に精力を傾けていたかをうかがい知ることができる。

一方、アルダビール市内(グラフ3)の場合、タフマースブ時代の寄進財産が半数以上の55%を占める。そのうち11件を数える家屋の案件はすべて初期の数年に集中しており(943-49/1536-42年)、そのほとんどが時の管財人(mutavalli)<sup>8)</sup>によって高値で購入されている。ここから、サフィー廟周辺は、サファヴィー朝に入ってから、それもタフマースブ時代に改めて整備が進んでいったことがうかがえる。なかでも1530年代後半から40年代初頭にかけて廟の隣の家屋数軒を購入しているが、これは、「ジャンナト・サラ「楽園の館」の庭園とその周辺の整備のため」と目的が明記



グラフ3 アルダビール市内のシャイフ別案件数

されており [*Şariḥ al-Milk*: 13b], 周辺の土地を買い占め、廟の敷地の拡張に努めている様子がはっきりと確認できる。ちなみにアルダビール市内の場合、購入対象となる物件は、家屋、店舗、浴場、隊商宿、屠殺場、水車小屋、紙漉き小屋、クローバー畑、庭園、土地と幅広い。郡部や地方になると、村が多くなるが、庭園や水車小屋や浴場も散見される。

また、母数が少ないながらもイラーケ・アジャムのイスマーイールによる寄進がやや目立つことから、サファヴィー朝の支配領域拡大に連動した、祖廟サフィー廟への寄進地の地理的拡がり確認できる。このことは次代のタフマースブになるとより顕著で、シールヴァーンやファールスといったアゼルバイジャン地方以外の土地の寄進が増加しており、教団から王朝への質的変化がここにも現れている<sup>9)</sup>。ただし、参考までに挙げた第2部を見ると明らかなように、売買文書などの証書のない物件では、169件(74%)がイラーケ・アジャムの土地となっており、そのうちの153件は、サドル・アッディーンと同時代の14世紀後半のロルのアターベクたちに関連する。もっとも、これらの物件は、不動産目録編纂時にも特定が不可能であったもの

8) サフィー廟の管財人については、本論集の近藤論文を参照のこと。後出するサファヴィー朝期の管財人たちについても同様。

9) 本稿で扱わなかった終章には、811-12/1409-10年と823/1420年のバグダードの物件が5つある [*Şariḥ al-Milk*: 169a-170a]。

であり、サフィー廟の占有物件とはされていないため、廟所有の不動産の推移を見るにあたってはさほど重要ではない<sup>10)</sup>。また仮にこれらの第2部の物件を加算したとしても、アゼルバイジャン地方の比率は66%であり、半数以上が同地方内の物件であることに変わりはない。

以上のように、サフィー廟不動産目録からは、サドル・アッディーン時代とタフマースブ時代に廟が拡大していったことや、サフィー廟の不動産はその半数がアルダビールとその近郊の村落にあったこと、そして文書や証書の裏付けのあるものとしては、圧倒的

多数がアゼルバイジャンに限定されることが明らかとなる。すなわち、16世紀中葉までのサフィー廟はきわめて「ローカルな」聖者廟だったのである。

## 2. スーフィー聖者廟としてのサフィー廟

### 2.1 サフィー廟の建造物

サフィー廟不動産目録には、サフィー廟の最も主要な不動産である「聖廟 (zāviya)」の各建物がリストの冒頭 (アルダビール市内の項の筆頭) に挙げられている [*Ṣariḥ al-Milk*: 9b-12b] (図1参照)<sup>11)</sup>。

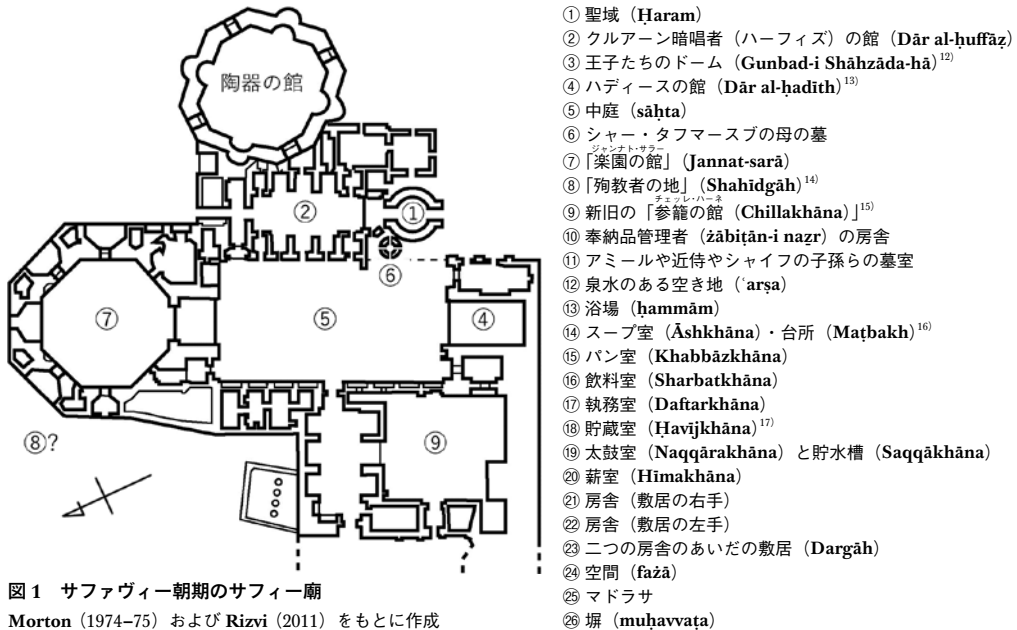


図1 サファヴィー朝期のサフィー廟

Morton (1974-75) および Rizvi (2011) をもとに作成

- 10) 不動産目録 3719 写本の欄外書き込みでは「非占有」とされている [*Ṣariḥ al-Milk*: no. 3719, 332]。  
 11) 個々の建物の詳細については、Morton 1974-75; Rizvi 2011; Luṭfi 2016 を参照のこと。  
 12) この建物は、シャー・アッパースの命によって 1611 年に建てられた「陶器の館 (Chinikhāna)」のあたりにあったと想定されている [Rizvi 2011: 89, 143-155]。  
 13) 「ハディースの館」の東西両側にはシャイフの子孫たちの墓があり、この建物の裏手には道を 1 本隔てて Sayyid Shaykh Shāh b. Khvāja Hasan Beg Ṣafavi の家があった [*Ṣariḥ al-Milk*: 10b]。  
 14) Rizvi は「殉教者の地」をサフィー・アッディーンらの墓のあるほうに想定しているが [Rizvi 2011: 12, 80 (Figure 2), 145 (Figure 10), etc.]、不動産目録には「楽園の館のドームの北側に位置する」とあり [*Ṣariḥ al-Milk*: 11a]、また後に拡大していったサフィー廟の墓地は楽園の館と陶器の館の北東側にあるため、当時の墓地もまた楽園の館のそばにあったと考えられる。  
 15) サフィー・アッディーンが利用していた旧館の場所は不明のため、ここでは新館の場所を⑨として図示する。  
 16) スープ室には台所のほか、米や小麦を貯蔵する釜室 (Digkhāna) や、北側には食器室 (Ayāqkhāna) などがある。  
 17) 2階建ての貯蔵室も古くからあり、一部の建物はタフマースブの時代に購入され、増床された [*Ṣariḥ al-Milk*: 12a]。

16世紀のサフィー廟は、おおむね図1の26の不動産登記される建物や敷地から構成されていた<sup>18)</sup>。なお、ひとつ注意しておきたいことは、サフィー廟で最も名高い「陶器の館」は、シャー・アッパース（在位1587-1629）治世下で「王子たちのドーム」(③)の上か近くに建設されるため、アブディー・ベグ版のサフィー廟不動産目録には現れない。

空き地のままの空間や、マドラサのわきに漆喰と焼成レンガで造られた塀でさえも記載されていることから、いずれにしても、サフィー廟所有の不動産を記録するサフィー廟不動産目録 (*Ṣarīḥ al-Milk*) には、敷地内のすべてを逐一記録しようとする姿勢が見てとれる。

## 2.2『ハヤーティー史』とサフィー廟の建造物

ここで、1570年に編纂されたサフィー廟不動産目録と時代的にきわめて近い1560年ごろに執筆された『ハヤーティー史』のサフィー廟の建物の箇所を確認しておこう。

『ハヤーティー史』によると、サフィー・アッディーン自身がもともと建築活動に関心がなかったために、サファヴィー教団の「本拠」となるこの場所には、「集会の館 (Jamā'atkhāna)」と呼ばれた<sup>チェッレ・ハーネ</sup>参籠の館の旧館と、礼拝所 (ma'bad) の2つしか建物がなかった。サフィー・アッディーンが亡くなると、第2代シャイフとして1334~91年の60年近くにわたって教団を率いたサドル・アッディーンは礼拝所に遺体を安置することは適切ではないと判断し、新たな建物の造営に着手した。こうしてサドル・アッディーンのもとで、サファヴィー教団の修行場は大きく拡張した。彼が1337~46年の

10年間をかけて最初に建造したのが、トルコ石色のドームのあるサフィー・アッディーンの墓所である。そして敷地内に水を引き、<sup>チェッレ・ハーネ</sup>参籠の館の新館と、台所とパン室、浴場と手洗所 (ṭahāratkhāna) を建設し、女性たちが埋葬されている場所にもドームを設けた [*Ḥayātī*: 83-87]。

サファヴィー朝期に入ると、サフィー廟の建造物は、管財人やサファヴィー王家関係者らによっても増改築されていく。その中の主要なものはタフマースブ期に集中し、イスマーイールの妻のタージュルー・ハーノムによって1538/39年から1547年にかけて造られた墓廟のドームが筆頭に挙げられる<sup>19)</sup>。また、<sup>ジャンナト・サラフ</sup>楽園の館の正面に、病院 (Dār al-shifā') とハディースの館を両側に配した<sup>20)</sup> イーワーンや、管財人のアミール・<sup>ジャンナト・サラフ</sup>アウハディーによる楽園の館のイーワーン (1533/34完成) と宿泊施設 (mihmānkhāna) (1543造) があり、さらに、飲料室、執務室、貯蔵室、そしてマドラサが、ハイダルクリー・ベグ、マアスーム・ベグ・サファヴィー、タフマースブの弟のサム・ミールザーら時々の管財人によって建設された [*Ḥayātī*: 87-88]。先に見た不動産目録との記述とあわせると、サドル・アッディーン期とタフマースブ期に大規模な拡張工事が行われたことがここからも裏付けられる。

## 2.3 サフィー廟とレザー廟

続いて、サフィー廟の特徴をつかむにあたり、マシュハドのイマーム・レザー廟と比較してみたい。イマーム・レザー廟は、言うまでもなく、シーア派第8代イマーム、アリー・レザー (アラビア語ではリダー) の<sup>マシュハド</sup>殉教地 (818没) にして墓であり、ティムー

18) Morton や Rizvi は以上の聖廟の建物に続けて浴場や水車、いくつかの房舎についてさらに訳出を試みている [Morton 1974: 42-44, 63-64; Rizvi 2011: 192-197]。

19) 「サフィー・アッディーンの墓の隣に」とあるのみで、どの建物を指すのかは不明。

20) 病院とハディースの館のちに場所を動かされた。病院の改修は、サム・ミールザーが管財人の任にあった1551/52年のことである。

ル朝 (1370–1507) 期に拡張し、サファヴィー朝下ではイラン唯一のシーア派イマーム聖廟として、特にタフマースブの関心と庇護のもと、大きく発展した [守川 1997]。

サフィー廟でもレザー廟でも重要な場所たる墓のある「聖域 (ハラム)」に加えて、「グルアーン暗唱者の館」、モスク、ハディースの館・マドラサ、聖廟で仕える者たち (farrāsh) が休息や寝泊まりをする「従者の館」、台所などは、レザー廟にも同様の機能を持っていた建物群が確認される。もっとも、規模は圧倒的にレザー廟のほうが大きく、レザー廟ではモスクやマドラサが 16 世紀初頭ですでに複数存在している (図 2 参照)。また、聖廟の外側に展開する一般墓地も両者ともにある<sup>21)</sup>。

一方、サフィー廟にあって、レザー廟では見られない建物として、参籠の館チェッレ・ハーネと、楽園の館と呼ばれる大広間が挙げられる<sup>22)</sup>。また、サイド・シャイフ・シャー・ハーンやサイド・アリー・ベグといったサイドが暮らす個人の家がある点も、レザー廟とは大いに異なる<sup>23)</sup>。これらのなかでも、注目すべきは「参籠の館」と「楽園の館」であろう。「参籠の館」は、ペルシア語で「チェッレ・ハーネ」と呼ばれるもので、「チェッレ」というのは「40」を指し、すなわち「40 日間のお籠り」をする場所のことである。サフィー教団にとってこの 40 日間のお籠りはきわめて重要な修行のひとつであり、サ



図 2 サファヴィー朝期のレザー廟  
‘Utāridi (1992) および Māhvān (2007) をもとに作成

- ① イマーム・レザーの墓
- ② クルアーン暗唱者 (ハーフィズ) の館
- ③ サイドの館
- ④ ゴウハル・シャード・モスク
- ⑤ バリーザード・マドラサ
- ⑥ 御頭 (バーラー・サル) マドラサ
- ⑦ 御頭 (バーラー・サル) モスク
- ⑧ 唯一神 (タウヒード) の館
- ⑨ アッラーヴェルディ・ハーンの本堂
- ⑩ ハータム・ハーンの本堂
- ⑪ 古中庭 (シャー・アッパースの本堂)
- ⑫ 宴の館

フィー廟にこの場所があるということは、ここがサファヴィー教団にとっての修行場であ

21) レザー廟には、「殺害の地 (Qatlgāh)」あるいは「洗淨の地 (Ghuslgāh)」と呼ばれた墓地があった。サフィー廟の「殉教者の地」は、1514 年のシャー・イスマーイールとオスマン朝のセリムが戦ったチャルディラン戦などでの戦死者たちの墓地であったという。

22) これらのほか、大勢の弟子たちが寝泊まりする修行場の必要施設であるハンマームは、レザー廟には表向き見れないが、『ハヤーティー史』にあるように、ハンマームが浴場のみならず手洗所を指すのであれば、レザー廟にも存在したことは疑い得ない。もちろん、聖域の拡大とともに、端のほうへと移動していったと考えられる。ただ、やはり薪室やボイラー室もある浴場がサフィー廟にあることは、他の聖廟やイマームザードとは異なるサフィー廟の特徴を示している。

23) *Sarih al-Milk*: 10b. ほかにサイド・ベグ・サファヴィーなど、サフィー廟にはサファヴィー家にとって重要なサイド個人の家があることから、レザー廟の「サイドの館」に近い働きを持っていたのかもしれない。両者の比較については、今後の課題である。なお、モンゴル時代に、ムハンマドの末裔であるサイドのために君主の意向で各地で建てられた「サイドの館」については、岩武 1992 が非常に参考になる。



ることにはほかならない。このサフィー廟の参籠チェッレ・ハーネの館は先にも見たように新旧のふたつがあり、旧館はサフィー・アッディーンが座していた場所で、一方は中庭に面し、一方は建物の房舎ジャンナト・サラや楽園の館や台所や「殉教者の地」に向かう廊下に面していた。また、新館はサドル・アッディーンが建設したもので、タフマースブの時代にタイルが施され、立派なドームが造られた。新館は上下階に40の小部屋がある [Šariḥ al-Milk: 11a]。旧館はサフィー・アッディーンが修行用に個人で利用していたが、新館は40もの小部屋があることから、サドル・アッディーン時代に弟子の数が大きく増えたことがうかがわれる。後述するように、オレアリウスは白い服を着てこの中で声をあわせて唱名する人々について言及している。一方の大広間ジャンナト・サラの楽園の館もまた、サファヴィー教団の修道場として重要である。ここでは教団の儀礼の根幹であるサマールウ（舞踊や旋回）やズィクル（唱名）が行われた [Luṭfi 2016: 58–59; Zarinebaf 2019: 305]。

以上見てきたように、サフィー廟にはサフィー教団の修行場に特有のお籠りの場所や大広間といった施設があることが、レザー廟などのイマーム聖廟との大きな違いである。確かに、1608年にシャー・アッバースが預言者ムハンマドや娘ファーティマと12人のシエ派イマームたちからなる「無謬の14人」に対して行った寄進の内容から判断されるように、クラーンやアラビア語のハディース学や法学の書物が主に寄進されたレザー廟と、歴史や詩などの手稿本のほか、1162個の中国陶磁器、翡翠、紅玉髓の器などが寄進され「陶器の館」が増改築されたサフィー廟とは、「シエ派信仰を体現するイマーム聖廟」と、「王家の聖廟」という明確な相違があった [Iskandar Beg: II 702;

Rizvi 2011: 143]。アルダビールのサフィー廟がサファヴィー王家の富の一部を移管した「王家の聖廟」であったことは言うまでもない。しかし、サフィー廟の建造物から明らかになるように、サフィー廟は王家の祖廟である以上に、「参籠チェッレ・ハーネの館」と「楽園ジャンナト・サラの館」を擁する「サフィー教団の教団長の聖廟」であり、その伝統は2世紀以上を経てもなお維持され、教団が王朝となってからも王家の庇護のもと脈々と受け継がれていたのである。

### 3. ヨーロッパ人の旅行記にみる サファヴィー朝下のアルダビールとサフィー廟

サファヴィー朝下のイランには多くの外国人がやってきたとはいえ、アルダビールを訪れたヨーロッパ人はさほど多くない。その中で最も古い記録のひとつと思われるものに、1590年4月にアルダビールに至ったフォン・トイフェルのものがある<sup>24)</sup>。彼は次のように言う。

[4月]26日、我々は「アルドフィラ (Ardofila)」[アルダビール]の町に到着した。イマームクリー・ハーンが道路を封鎖したために、我々は48日間かけて通常ではない道を通らなければならなかった。さもなければ、カズヴィーンからここまでは10日間で簡単に旅行できる。

この町はアルダビールと呼ばれる。さほど大きな町ではないが、それにもかかわらず有名である。なぜならシャー・ソフィー (Schach Sophy) の王墓があるからであり、私はその墓をぜひとも見たかったために、ペルシア人の司祭にいくばくかの金を払って中に入れてもらった。この墓はとても美しいモスクで、外側はすべて彩釉タイルで覆われている。入る際には、慣習どお

24) オーストリア出身の Hans Christopf von Teufel は、エルサレム巡礼の後、バスラ=ホルムズ経由でペルシアを訪れ、シーラーズ、イスファハーン、カズヴィーンとめぐった後、タブリーズからアナトリア経由で帰国するにあたり、アルダビールを通過した [Von Teufel: 1–42]。

りに靴を脱がなければならなかった。(中略) モスクの外側には大きな台所があり、金曜日にはたくさんの米が炊かれ、神のために貧者に与えられる。私はこれこそがペルシア全土で見たもののなかで最も美しいと思った。[Von Teufel: 32]

### 3.1 17世紀のアルダビール

サファヴィー朝下のアルダビールについて最も詳細に伝えるのは、ホルシュタイン使節団の書記官であったオレアリウスである。オレアリウスはカスピ海西岸からコーカサスを抜ける北方ルートから1637年4月10日にアルダビールに入り、2か月滞在した後、6月12日にアルダビールを発った。彼は、アゼルバイジャンの最も主要な町として「アルダビール (Ardebil) とタブリーズ (Tauris)」を挙げ、さらに、冒頭に掲げたように、アルダビールはサフィー・アッディーンが暮らしたことゆえに「最も祝福された町」だという。また、交通量が非常に多い場所であり、「東方の中で最も重要な都市のひとつに数えられる」と記している [Olearius: 198, 238]。

このような17世紀のアルダビールは、ペルシア語話者よりもトルコ語話者が圧倒的に多く、町(図3)は非常に小さいが、シールヴァーンの首府であるシャマーヒーよりも少し大きく、町の手前で分岐する川はあるが、市壁がなかった [Olearius: 238-239]。市壁がないというのは、前近代の西アジアの都市ではきわめて珍しい。ちなみに、どの家にも庭があるため、アルダビールは遠くからは町ではなく森に見えるという<sup>25)</sup>。春になると増水して氾濫を起こす川のほかに、町にはたく

さんの小路があり、両側に「街路樹のある5本の立派な大通り」があった。プラタナスがまっすぐに大通りの両脇に立ち並ぶ光景は、イスファハーンのチャハールバグ大通りを彷彿させる。ただし、アルダビールの家々は土でできており、通りは凸凹で汚く、狭かったともいう [Tavernier: 58]<sup>26)</sup>。また町のあちらこちらには「王室の所有する美しい庭園」があるとされており [Ibid.]、推測の域を出ないが、おそらくその大半はサフィー廟に属したのだろう。

さて、サファヴィー朝期のアルダビールには、サフィー廟、金曜モスク、バーザールの3つの中心があった<sup>27)</sup>。この中で、小高い丘の上の金曜モスクについてはあまり言及がなく、ヨーロッパ人の旅行記では、「町の中心にあり、金曜日や祭日には大勢の人がこのモスクを訪れ、美しい尖塔がある」 [Olearius: 239] と記されるにすぎない。ただし、オレアリウスは、金曜モスクの前にある泉水は、のちに大宰相となるサールー・タキー (1645没) がアルダビールの財務長官として赴任していたときに町の1リーグ先から水を引いて掘削したことに触れている [Ibid.]。

「市の立つ広場、すなわち広場 (Maydan) は大きく、立派である。長さは300歩、幅は150歩である。両側には実に整然と並ぶ店舗がある。商人組合もギルドもないが、専用の区画がある」とオレアリウスは続けて述べる。その右手には、サフィー廟の裏手に「彼らの12聖人の子孫の1人」であるイマームザーデ・サーリフの埋葬されているモスクがある。広場を出ると、バーザール (Basar) に行き当たり、「皇帝市場 (Kaiserie)」と呼

25) 17世紀中葉に数度にわたってイランを訪れたタヴェルニエもまた、庭付きの建物のために「町ではなく森に見える」と、イスファハーンについて同じように述べている [Tavernier: 389]。

26) そのためかどうかはわからないが、オレアリウスは「朝はアルダビール、昼は鋤の埃だらけ *Saba Ardebil, Nimrus Kardebil*」というペルシア語の押韻句を伝えている。

27) *Pirbābā'i* ほかも同様の指摘をした上でさらに、町の中心にあった広場がこれら3つの主要建造物の結節点の役割を果たしていたと論じるが、やや牽強附会にすぎる [Pirbābā'i et al. 2020: 80]。むしろ絵図からは、イスファハーンなどの都市と同様に、広場とそこに隣接する「皇帝市場」とバーザールが中心に位置していると考えられる。

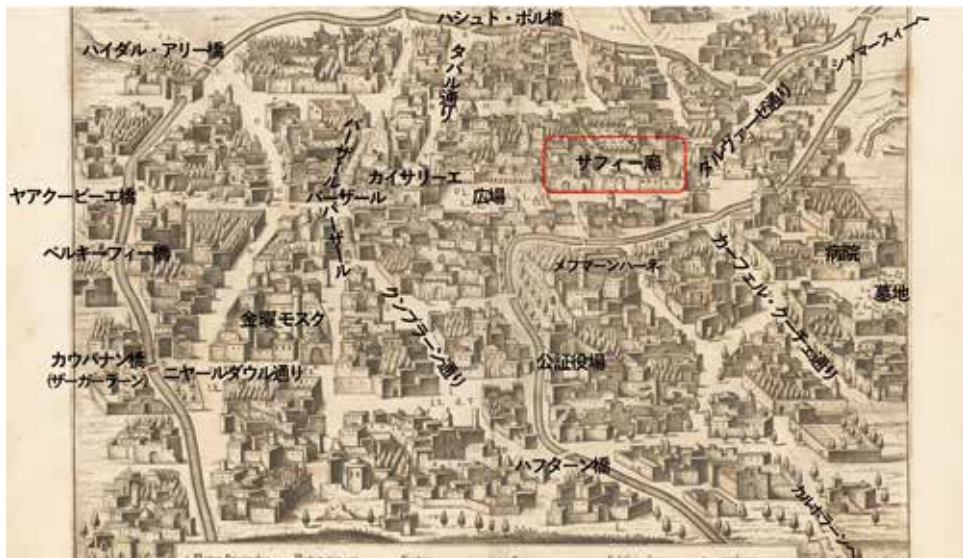


図3 17世紀中葉のアルダビール (Olearius, *Moskovitische und Persische Reise*)

ばれるアーチ状の正方形の大きな建物があった<sup>28)</sup>。そこでは「金糸・銀糸の織物、あらゆる種類の貴石、絹織物といった、この国の貴重な商品のすべてが売られてい」た。そこを出て3つの門を通ると、アーケードのある何本もの小路があり、店が建ち並び、ありとあらゆる商品が販売されていた。そして、通りには「トルコ人、タタール人、インド人などの外国人商人」の便宜のために建てられた隊商宿 (Caravanseras) がいくつもあった。ちなみにオレアリウスはこのパーザールで、陶磁器や漆器を売りに来た2人の中国人を見かけたと言う [Olearius: 239]。このパーザールの店舗の一部は、先述のように、サドル・アッディーンやタフマースブのもとでサフィー廟のために購入され、ワクフが設定されている [Šariḥ al-Milk: 14a-23a]。

オレアリウスによると、アルダビールでは、アーシューラーのフサインの哀悼行事が町をあげて盛大に挙行され、シーア派信仰が浸透している様子がうかがえる。一方、飲酒の慣行は多々見られたとはいえ、イランのほかの

都市と異なり、アルダビールには娼婦がいなかったようである [Olearius: 235, 319]。

17世紀のアルダビールは、市壁のない小さい町でありながらも、街路樹の並ぶ整然とした大通りや、町の中心に位置する広場と「皇帝市場」、そしてその隣にアーケードのあるパーザール街など、サファヴィー朝の都であったカズヴィーンやイスファハーンと同じような造りになっている。金曜モスクへの水路の掘削といった開発事業もサファヴィー朝の要人によってなされていることから、この町は、サファヴィー朝の首都に準じる位置づけにあったといえることができるだろう。

### 3.2 ヨーロッパ人の見たサフィー廟

シャイフ・サフィーとペルシアの最近の王たちの豪華な建物は広場の近くにある。ペルシア人たちはその場所を「メザール (Mesar) (マザール)」と呼ぶ。[Olearius: 240]

サフィー廟は「<sup>マザール</sup>参詣地」であり、多くの巡

28) 「皇帝市場」はサファヴィー朝の首都のカズヴィーンにもイスファハーンにもあり、主たる広場に面して造られた。



図4 サフィー廟 (Olearius 絵図部分)

礼者を惹きつけた。それは、ヨーロッパ人たちも同様である。フォン・トイフェル、オレアリウス、タヴェルニエなど、アルダビールを訪れたヨーロッパ人たちはみな一様に「あまりにもその聖なる墓所を見たかったために」頼み込んで、サフィー廟の中に入った。そのような彼らの旅行記からは、ペルシア語史料ではうかがい知れないサフィー廟の様子がわかる。以下、簡単に見ていこう。

サフィー廟の前庭や中庭は、アルダビール市中の未舗装の通りとは異なり、石が敷き詰められていた。前庭の両側にはアーチがあり、イスファハーンの「王の広場」のように、中には多数の商人や職人が店を構え、“門前町”を形成している<sup>29)</sup>。中庭では武器を預け、その先は靴を脱がなければならない。敷居門やサフィー・アッディーンの墓所の入り口には白い大理石があり、「その上を足で踏んではならず、右足を先にして跨ぐこと、何兆もの人が口づけしてきた場所で、足で冒瀆するなどもってのほか」であった [Olearius: 240]。聖域の敷居に口づけし、右足から入るとするのは、イラクやイランのシーア派イマーム廟でも推奨されている参詣作法であり、とりわけサファヴィー朝期には、シャー・アッバースの法学顧問であったシャイフ・バハーイー (1621 没) がイマーム廟の参詣作法と

して記している [守川 2007: 112–115]。そのアッバースが 1611 年に行ったマシュハドのレザー廟への徒歩参詣は有名であるが、ここアルダビールでも、アッバースは幾度となくアルダビールの半リーグ (2~3 キロ) 先から靴を脱ぎ、裸足で廟まで歩いてきたという [Olearius: 241]。

サフィー・アッディーンの墓所では金や銀のランプが灯され、床は大理石で、あたり一面に金が豊富に施され、墓には金色の絹の布がかけられていた。その手前のクルアーン暗唱者の館は絨毯が敷き詰められ、壁にもタペストリーがかかっていた。オレアリウスらの一行が廟に入った際、参籠の館 (Thschillachane) では、白い服の修道士たちが壁際に座したまま体を左右に揺らし、声をあわせて大声で歌っており、またここは、サフィー・アッディーンが毎年斎戒のために 40 日間籠り、1 日にアーモンド 1 粒のみを食した場所であると教えられている。楽園の館 (Tzenetsera) は図書室になっており、アラビア語やペルシア語やトルコ語の豪華な装丁本が壁に並び、壁龕には 300~400 個以上の陶器が置かれていた [Olearius: 240–241]。

ところで、サフィー廟の中に入った者は、廟で食事が供されることにも注目をしている。イマーム廟でもワクフの使用目的の中に

29) Olearius: 240; Tavernier: 59. イスファハーンの王の広場とその周辺の商業空間については、拙稿 2020 を参照されたい。

貧者への食事や衣服の供給があるが [Mori-kawa & Werner 2017: 25-26]、サフィー廟では毎日、台所のそばで食事が振舞われた。タヴェルニエは、サフィー廟には25~30の竈と同じくらいの数の炉があり、貧者や廟の関係者らのために肉や米が調理されたという [Tavernier: 59]。また、オレアリウスによると、食事は6時・10時・15時の1日に3回あり、1000人にポタージュ・米・肉が供された。そしてこの朝の2回の食事のために、1日あたり50クラウンがサフィー廟の財から支出され、午後の食事は王室からの喜捨で賄われたという [Olearius: 242]。貧者への施しとは別に、ホルシュタイン使節団一行は、前アルダビール長官にして管財人でもあったズー・アルフィカール・ハーンの建てた邸宅を滞在用にあてがわれたが、毎日の食事はサフィー廟から運ばれた。滞在初日には米や肉の32皿の大皿料理が運ばれ、最終的に2か月間の滞りで「パン—1960バトマン<sup>30)</sup>、ワイン—6250バトマン、卵—9300個、羊—477頭、ラム—472頭」もの量になった [Olearius: 230]。ここからは、本来であれば宮廷が行うべき国賓の饗応を、サフィー廟が請け負っていたことが明らかとなる。サファヴィー宮廷にとって、サフィー廟は「祖廟」というだけではなく、タヴェルニエが言うところの「王室の邸宅 (cette maison Royale)」 [Tavernier: 59] であり、イラン北西部の要衝に位置した「王宮」や「城砦」だったと言えるのではなかろうか。

加えてオレアリウス一行がアルダビールに入る際、盛大な歓迎がなされたが、その中に先導する2人の若者がおり、彼らは「ムハンマド、アリー、シャー・サフィー (Schach-Sefi)」を讃える文言を唱え続けたという [Olearius: 229]。ここでの「シャー・サフィー」は君主を指す可能性もあるが、他

の都市では見られないことから、サフィー・アッディーンの名と考えることができよう。それほどまでに、アルダビールは町をあげてサフィー・アッディーンに帰依していたのであろう。また、これも重要な点であるが、タヴェルニエはサフィー廟が犯罪者や逃亡者の「避難先」たる「バスト」の場所であることにも触れている [Tavernier: 59]。

また、オレアリウスはサフィー廟の所有下にあるものを列挙している。すなわち、アルダビール市内の家屋200軒、公衆浴場9軒、隊商宿8軒、「皇帝市場」とその広場すべて、牛肉・小麦・塩・油が販売されるバーザールにある店舗100軒、青空市場の露店用台、33のアルダビール周辺の町や村、サラブの5つの村、タブリーズ市内の60軒の家屋と100軒の店舗、2つの村、カズヴィーンおよびギーラーンやアースターラーのいくつかの隊商宿と浴場、モガン地方の2つの村の租税、ほかの村々の租税の一部、である。ここに、シーア派のタタール人やインド人から送金されるものや、旅行や病気や宗教行事の際に送られてくる各地からの奉納品、それらに加えて、あまたの贈り物、寄付、遺贈があるという。しかも馬・ロバ・ラクダ・羊・金などありとあらゆるものがサフィー廟に奉納される<sup>31)</sup>。

こうして実際にサフィー廟の富を目の当たりにした者は、その潜在的な富と力に圧倒される。「このメザールは、かなり強力な軍隊ともなり得るだろうし、国王以上に金を準備して供出することができるだろう」というオレアリウスの言葉は慧眼以外の何物でもない [Olearius: 243]。そして、2か月の滞りでサフィー廟について熟知した彼は、サドル・アッディーン (Sedredin) とジュナイド (Tzinid) が教派の確立と発展に熱心であり、時間の経過とともにこの教団は非常に強力になり、「シャイフはシャーとなり、彼ら

30) 1バトマンは6.5ポンド [Olearius: 230]。

31) これらの奉納品の管理をするのが“Nassurtzchan”，すなわち「奉納品管理者 (nazrchiyan)」である [Olearius: 243]。ここに挙がる寄進地と不動産目録の照合は今後検討していきたい。

の預言者たちはその性質を国王へと変えた」とさえ述べるのである [Olearius: 372]。

### 3.3 サファヴィー朝下の「聖都」アルダビール

——その宗教的・経済的重要性を中心に  
ペルシア全土からシャー・サフィー (Cha-Sefi) の墓廟へ巡礼者が訪れ、大規模な絹交易とともに、アルダビールは王国の最も重要な町のひとつとなっている [Tavernier: 59]。

タヴェルニエのこの言葉に象徴されるように、サファヴィー朝下のアルダビールの重要性は2点ある。ひとつは巡礼地として発展していることであり、もうひとつは生糸・絹製品交易の最重要な中継地として認識されていることである。

まず、アルダビールを巡礼地として挙げているヨーロッパ人たちの記述を見てみよう。1670年代前半にイランを訪れたベディクは、ペルシア人が巡礼する場所を4つ挙げているが、メッカ、カルバラー、マシュハドに次ぎ、最後にアルダビールを挙げる。

最後に、おそらく最も重要な巡礼の場所はアルダビールの町である。そこはかつて有名なスーフィーのシャイフ・サフィーが住んでいた。とても壮麗な建物の下に彼の墓が今もあり、あらゆる種類の宝物にあふれている。とりわけ、ペルシアでは、王の戴冠式の際にはこの墓で祝福を受けなければならないほど、この場所は信仰の対象となっている。本人が直接受ける場合もあれば、巡礼者の仲介で本人に代わってこの祝福を受ける場合もある。[Bedik: 113]

同様に、1680年代にイランを訪れたケ

ンペルは、マシュハドのレザー廟、コムファータメ廟、そしてアルダビールのシャイフ・サフィー廟こそは、王室の壮かさや荘厳さにおいて他の墓廟を凌駕していると述べる [Kaempfer: 94]。ここからも、アルダビールがとりわけサファヴィー朝の君主たち、すなわちサファヴィー家の者たちにとって重要であったことがわかる。

もうひとつの「絹交易の中継地」としてのアルダビールであるが、サファヴィー朝が王室として生糸の独占交易を行っていたことは周知の事実である<sup>32)</sup>。タヴェルニエは、アルダビールがギーラーン産の生糸の最初の一大交易地として有名であると折に触れ述べている [Tavernier: 58]。

アルダビールは、王家の廟があるというだけでなく、ペルシア全土から巡礼に来ることでも名高い。時にラクダ800~900頭にもぼる絹の隊商の到来は、この町の名声にいっそう寄与する。[Tavernier: 83]

この絹交易の中継地としての役割が、旅行者が比較的多くアルダビールを訪れていたことにつながる。特に、16~17世紀には、オレアリウスのように、ロシアやカスピ海西岸を経由する北方ルートをたどってイランに入る旅行者も多く、ギーラーンやシールヴァーンといった王家が専売した生糸の生産地に近いという地の利がアルダビールにはあった。本節冒頭で見たように、フォン・トイフェルは道路封鎖でより時間がかかったにもかかわらず、タブリーズに行く前にわざわざアルダビールに立ち寄っている。これは、同道した隊商の都合であり、この当時でさえも、アルダビールは商人らにとって迂回してでも行かなければならない町だったのである<sup>33)</sup>。

32) サファヴィー朝の生糸交易については、さしあたり Matthee 1999 および Baghdiantz McCabe 1999 を参照されたい。

33) 1590年ごろ、オスマン朝との国境はアルダビールから2日行程のサラーブにあった。また、Von Teufel は、マランドでペルシアが終わり、大アルメニアが始まると述べる。彼自身は隊商にあわせてアルダビールに8日間滞在した [Von Teufel: 33, 36]。

アルダビールの重要性はマシュハドと比較するとわかりやすい。少なくとも、サファヴィー朝期にマシュハドまで足を延ばしたヨーロッパ人はきわめて少なく、16～17世紀のレザー廟の様子はさほど明らかにはなっていない。マシュハドやレザー廟に比して、アルダビールはオスマン国境に近く、ロシアからの南下ルート上に位置するという地の利と、サファヴィー朝の主要輸出品であった生糸や絹製品の集積地・中継地であることから、断片的であるとはいえ、マシュハドよりも相当多くの情報が集まる。この点に関連して、最後に、サファヴィー朝下のサフィー廟は外国人に対してもオープンであり、そのことが交易目的であれ対オスマン同盟政策であれ、「ペルシア」を目指したヨーロッパ人を惹きつけたことを挙げておきたい。

異教徒の外国人であっても廟内に入れたという事実は、イマーム聖廟とは大いに異なる。中国で捕虜となり、中央アジア経由で逃れてきたアンデルセンは、1650年にマシュハドにたどり着いた。「マシュハドはホラーサーンで最も重要な町である。それは大きく、頑丈に造られており、堅固な壁に囲まれている。ペルシア式の堅牢な塔がいくつもある。これらのおかげで外から見た町は、中から見るとよりいっそう立派に装飾が施されている。ただし、アリーの子孫の一人であるレザーの墓は別である。外から見てもレザーの墓は非常に美しく、建物はすばらしい。私は中を見たい。なぜなら中に入ることは許されていないからである」と述べている [Andersen: 140]。

一方、オレアリウスはマシュハドには行っておらず、ポルトガル人のテイシェーラの記

録をもとにしているが、レザー廟を説明するにあたって、「この町には、ペルシアの12人の聖人のうちの1人であり、アリー家のものであるイマーム・レザーの墓がある。墓の規模、収入、そして富については、アルダビールのそれに匹敵する。そこでもまた、すべてのことが同じ儀礼で執り行われる」と、サフィー廟を基準にしてレザー廟について述べているほどである [Olearius: 199]。

サファヴィー朝末期の1700年にイランを訪れたシリングーは、タブリーズで同宿したフランス人たちから、アルダビールをぜひとも訪れ、サフィー廟を見物するよう強く勧められた。その際、彼はアルダビールのことを「ペルシアのイスラーム教の第二の創設者の生まれた場所」と言い、サフィー廟のことを「ペルシア人の誇る壮麗さ、並外れて美しいメザール (mesar) であるシャー・サフィーとのちの数名の王たちの墓廟」と表現している。さらに、「このメザールは、3つの主要な前庭のある宮殿のようなものだと言われている」おり、聖廟は「数百万の財産を有しているが、それは偉大なる王たちの寄進と、今でも毎年なされる奉納品ゆえである」と述べる [Schillinger: 229–230]。ここからも明らかかなように、サファヴィー朝が緩やかに下り坂に入っていたこの時代においてさえも、サフィー廟はサファヴィー朝の“富の集積地”とみなされており、宝石がちりばめられた棺をはじめ、絹織物やタペストリー、絨毯、陶磁器、金銀の調度品の数々は、廟の中に入ることを許された外国人たちを驚嘆させた<sup>34)</sup>。サファヴィー王家の蓄財は、サファヴィー朝が成立した最初期からサフィー廟を「宝物庫」として連綿と続けられ、そしてアルダ

34) サファヴィー朝期 (特に16世紀) には、アルダビールより100キロほど北西のカフカハ城砦が牢獄および財宝の保管場所として知られていた。ここに幽閉されたのは、タフマースプの弟のアルカース・ミールザーや、サフィー廟の管財人をも務めたサーム・ミールザー、そして即位前のシャー・イスマーイール2世 (在位1576–77) らである。王家の“反逆者”たちの牢獄として名高いが、人里離れた山中にあるこの城砦は、王家の私的な宝物庫でもあった。サフィー廟が整備されるにつれ、宝物庫の役割が移譲された可能性もあろう。シーア派信仰を推し進めたサファヴィー朝下の「聖廟」の役割については、今後さらに検討していきたい。

ピールは、サファヴィー王家やひいてはサファヴィー朝そのものの隠し財産とも言えるサフィー廟の存在ゆえに、ヨーロッパ人を魅了し続けたのである。

### おわりに

1555年のアマスィヤの和議の締結後、シャー・タフマースブはサファヴィー家の祖廟に対して、様々な施策を行った。その一環として、文人官僚のアブディー・ベグに命じて不動産登記を整理し、不動産目録を作成することで廟財産の把握に努めるとともに、ハヤーティーには新たな教団史を編纂させた。アブディー・ベグのサフィー廟不動産目録からは、サファヴィー教団設立から200年ほどの財産形成の過程がおぼろげながら浮かび上がる。一方、『ハヤーティー史』では、サフィー・アッディーンが建設活動には熱心ではなく、常に「人々の心の修復」に専心していたと述べられている〔Hayati: 83〕。しかし、サフィー廟不動産目録には、少ないながらもサフィー・アッディーン自身が購入し寄進を行った農村や土地が見られることから、教団を経済的に維持していくためには、相応の不動産が必要であったことが明らかとなる。

何よりも、二代目シャイフのサドル・アッディーンが並外れた尽力をしたことにより、サファヴィー教団は教団としての足場を得たのであろう。この点は、王朝創設と領土獲得のための戦いに明け暮れたイスマールと、その後、半世紀以上の長きにわたって統治したタフマースブの関係と重なる。事実、サフィー廟不動産目録からは、イスマールのサフィー廟への“貢献”はさほど多くはないことが読み取れる。反面、タフマースブはきわめて熱心にサフィー廟の発展に寄与している。もっとも、それらの活動の多くは、任命された廟の管財人たちの努力のたまものであり、それをタフマースブ個人に帰することはやや無理があろう。だが、「創設者」と

は別に、二代目の尽力があって初めて、王朝であれ教団であれ、足場を固めてより発展することができる。その際、彼らは不動産をワクフ設定することにより、永続的に財政基盤が安定することを望んだ。きわめて意図的に、また率先して、土地や農地や商業施設を購入し、廟に寄進し、廟運営に積極的に関わったのである。こうしてサフィー廟は「ローカルな聖者廟」から「国家の祖廟」へと位置づけを変えていく。

タフマースブの没後のサファヴィー朝そのものの混乱と、オスマン朝との国境紛争を経て、国境の最前線ともなった17世紀のサフィー廟は、名実ともにサファヴィー朝およびサファヴィー家の祖廟として重要な位置を占めた。サフィー廟を擁するアルダビールは生糸や絹の交易の中心地として経済活動が活性化し、多くの巡礼者が訪れ、そして巡礼者経済による再循環から、あまたの金品がサフィー廟に寄進され奉納された。このような中で、サフィー廟は、レザー廟やイランの他の聖廟やイマームザーデとは異なり、異教徒の外国人たちを聖廟の中に招き入れ、食事すら提供した。これはひとえに、教団長でもあるサファヴィー家の君主たちの意向次第で可能なことであるが、他方、サフィー廟はサファヴィー王家にとっての“私的な宝物庫”として、首都イスファハーンの王宮には保管していない金や銀や絹製品や絨毯や舶来の中国陶磁器などの莫大な富や、信徒たちからの動産・不動産の寄進や奉納によって支えられ蓄えられてきた圧倒的な経済力を、内々に見せる意味もあったのだろう。

イスファハーンに遷都したシャー・アッバースにとって、イラン北東部のマシュハドと並び、イラン北西部に位置したアルダビールは、外敵からの防衛のための「門」や「砦」であり、王家ひいては王朝を守る「守護聖者」の眠る「聖地」であり、そして賓客をもてなす際の「王宮」にして「副都」だったのではないだろうか。「教導の都」という称号を冠



するサファヴィー朝下のアルダビールは、サフィー廟を擁する聖廟都市であるとともに、「神に護られたる」サファヴィー朝領域の北西の要衝として機能していたのである。

### 参考文献

#### ●一次史料●

- Andersen: Andersen, Jürgen and Volquard Iversen. *Description of Travels in the Orient (1650)*. In: *German Sources on Safavid Persia* (Willem Floor trans.), 127–172. [Washington, D.C.]: Mage Publishers. 2020.
- Bedik: Bedik, Pedros. *A Man of Two Worlds: Pedros Bedik in Iran 1670–1675*. Translated and Annotated by Colette Ouahes & Willem Floor. Washington DC: Mage Publishers. 2014.
- Ḥayātī: Ḥayātī Tabrizī. *A Chronicle of the Early Safavids and the Reign of Shah Ismā‘il (907–930/1501–1524)*. Ed. by Kioumars Ghereghlou. New Haven: The American Oriental Society. 2018.
- Iskandar Beg: Iskandar Beg Munshī. *‘Ālam-ārā-yi ‘Abbāsī*. 2 vols. Ed. by Īraj Afshār. Tehran: Amīr Kabīr. 1334Kh/1955–56.
- Kaempfer: Kaempfer, Engelbert. *Exotic Attractions in Persia, 1684–1688: Travels & Observations*. Translated and Annotated by Willem Floor and Colette Ouahes. Washington DC: Mage Publishers. 2018.
- Olearius: Olearius, Adam. *The Voyages & Travels of the Ambassadors sent by Frederick, Duke of Holstein, to the Great Duke of Muscovy, and the King of Persia; Begun in the Year M. DC. XXXIII and finished in M. DC. XXXIX. Containing a Compleat History of Muscovy, Tartary, Persia and other adjacent Countries*. English Trans. by John Davies. London. 1662.
- Olearius, Adam. *Moskovitische und Persische Reise: die holsteinische Gesandtschaft beim Schah; 1633–1639*. Stuttgart-Wien: Thienemann. 1986.
- Šariḥ al-Milk: ‘Abdi Beg Shirāzī. *Šariḥ al-Milk*. Tehran, Mūza-‘i Milli-ī Īrān. Mss. 3718, 3719.
- Schillinger: Schillinger, Frantz Caspar. *Persian and East Indian Journey (1700)*. In: *German Sources on Safavid Persia* (Willem Floor trans.), 196–294. [Washington, D.C.]: Mage Publishers. 2020.
- Tavernier: Tavernier, Jean Baptiste. *Les six Voyages de Jean Baptiste Tavernier*. Tome I. Paris: Gervais Clouzier et Claude Barbin. 1676.

Von Tafel: Von Tafel, Freiherr Hans Christopf. *Description of the Journey (1589–90)*. In: *German Sources on Safavid Persia* (Willem Floor trans.), 1–42, [Washington, D.C.]: Mage Publishers. 2020.

#### ●二次文献●

- Baghdiantz McCabe, Ina. 1999. *The Shah’s Silk for Europe’s Silver: The Eurasian Trade of the Julfa Armenians in Safavid Iran and India (1530–1750)*. Atlanta: Scholars Press.
- Fragner, Bert G. 2013. “Ilkhanid Rule and Its Contribution to Iranian Political Culture.” *Beyond the Legacy of Ghenghis Khan* (Linda Komaroff ed.), 68–80, Leiden and Boston: Brill.
- Gronke, Monika. 1993. *Derwische im Vorhof der Macht*. Stuttgart: F. Steiner Verlag.
- Luṭfī, Maryam. 2016. *Buq‘a-‘i Shaykh Ṣafī al-Dīn Ardabilī dar dawra-‘i Ṣafaviyān*. Tehran: Manshūr-i Samīr.
- Māhvān, Aḥmad. 2007. *Tārīkh-i Mashhad al-Rizā*. Tehran: Kitābkhāna va Markaz-i Asnād-i Bunyād-i Īrānshināsī.
- Mathee, Rudolph P. 1999. *The Politics of Trade in Safavid Iran: Silk for Silver, 1600–1730*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Morikawa, Tomoko and Christoph Werner. 2017. *Vestiges of the Razavi Shrine: Āthār al-Razaviya: a Catalogue of Endowments and Deeds to the Shrine of Imam Riza in Mashhad*. Tokyo: The Toyo Bunko.
- Morton, Alexander H., 1974–75. “The Ardabil Shrine in the Reign of Shah Tahmasp I.” *Iran* 12, 13: 31–64, 39–58.
- Shaykh al-Ḥukamāyī, ‘Imād al-Dīn 2009. *Fihrist-i Asnād-i Buq‘a-‘i Shaykh Ṣafī al-Dīn Ardabilī*. Tehran: Kitābkhāna wa Mūza wa Markaz-i Asnād-i Majlis-i Shūrā-yi Islāmī.
- Pīrbābā‘ī, Muḥammad Taghī, Aḥad Nijād Ibrāhīmī and Sāmān Abizāda. 2020. “Bāzkhānī-i sākhṭār-i shahr-i Ardabil dawra-‘i Ṣafaviya bar asās-i taṭbīq-i mutūn-i tārikhī dar naqsha-‘i Ādām Oliarius (Re-reading the structure of Ardabil City in the Safavid Period Based on the Adaptation of Historical Texts in the Map of Adam Olearius).” *Nashriya-‘i Honarhā-yi Žībā (Mi‘mārī va Shahrāsāzi)* 24(4): 71–82.
- Rizvi, Kishwar. 2011. *The Safavid Dynastic Shrine: Architecture Religion and Power in Early Modern Iran*. London: I. B. Tauris.
- ‘Uṭāridī, ‘Azīz Allāh. 1992. *Tārīkh-i Āstān-i Quds-i Rizāvī*. 2 vols. Tehran: Intishārāt-i ‘Aṭṭār.
- Zarinebaf, Fariba. 2019. “Azerbaijan between

- Two Empires: A Contested Borderland in the Early Modern Period (Sixteenth–Eighteenth Centuries).” *Iranian Studies*, 52(3–4): 299–337.
- 岩武昭男 1992 「ガザン・ハンのダールッスィヤーダ (dār al-siyāda)」『東洋史研究』50(4): 554–588.
- 守川知子 1997 「サファヴィー朝支配下の聖地マシュハド——十六世紀イランにおけるシーア派都市の変容」『史林』80(2): 1–41.
- 守川知子 2007 『シーア派聖地参詣の研究』京都大学学術出版会.
- 守川知子 2020 「近世イランの王都の中のキャラバンサライ——『イスファハーンのキャラバンサライ案内』を中心に」『新学術領域研究『都市文明の本質——古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 2』研究成果報告 2019 年度: 207–221.